

企業のスポーツへのかかわりに関する研究

A study of relations of enterprise to sports

1K06A0292

指導教員 主査 倉石平先生

野村 雄太郎

副査 斎藤修平先生

一、 本論の狙い

わが国のスポーツは地域、クラブ、企業、学校、プロを基点としながら多様な種目を取り入れながら発展している。なかでも企業スポーツとプロスポーツはその経済規模、参加人数、加えてパフォーマンスのレベルにおいて群を抜いており、スポーツ世界をリードしてきたといえる。さらに、企業スポーツとプロスポーツの意義はスポーツメディア、スポーツビジネスと関係づけられながら、依然として高い位置にあると言っていいだろう。プロ経営、企業スポーツ経営の現場からプロスポーツを囲む経済的、文化的状況を事例提示しながら解明していく。また比較として企業スポーツの現状を事例提示しながら解明し、プロスポーツと企業スポーツの決定的な差と類似性について述べていきたいと考えている。そのことを通じて、現代のスポーツ状況の一端を解明していきたい。

二、 本論の展開

1 章では、企業スポーツの歴史を紐解き、その創世・隆盛・衰退の流れを読み解くことで、我が国独自の文化ともいえる企業スポーツの特徴に迫る。日本において企業スポーツは宣伝効果としての役割だけではなく様々な役割を果たしてきた。時代の流れの中でのそれら役割の変化と、企業スポーツの持つ価値の変化が企業スポーツの衰退を進めたことを理解したい。

2 章では、企業スポーツの枠を飛び出し、プロ化を図ろうとするラグビーのトップリーグに

焦点を当て、ラグビーそのものの歴史や、トップリーグの現状を見ながら、プロ化への現実と障壁を分析した。様々な雇用形態の選手の存在や、入場料収入の扱われ方など、トップリーグがまだまだ企業スポーツの枠内からはみ出しきれない理由をあげ、スポーツリーグがプロ化を果たす際の条件を照らし出した。

3 章では、まず、実際にプロ化を成し遂げ、日本で大きく発展を遂げたといえるプロ野球並びにJリーグを例にあげ、相違点が多く見られる両リーグのシステムについて比較・検討した。さらに続けて、企業がどのようにプロスポーツに関わっているのかに焦点を当て、スポンサーの現状について、その特徴と問題点を考察した。さらにアマチュアスポーツからトーナメントのプロ化を果たしたテニスを取り上げその流れも記した。プロ野球とJリーグのシステムに関して言えば、それぞれ異なった特徴的な組織を構成し、それぞれが成長を続けた。その結果として、お互いが他方へと近づいた一面があるなど、どちらかに優劣をつけるのではなく、その特徴を鮮明にすることに力を注いだ。スポンサーに関しては、その説明にのみ終始するのではなく、制度が抱えている大きな問題点にも言及し考察した。

4 章では本論のまとめとして、現在スポーツが置かれている厳しい状況を改めて示すとともに、今後その争いの中を進んでいかなければならないことを示した。つまり、とても簡単なこ

とではあるけれど、今現在の状況に満足し立ち止まるのではなく、自らを成長させ続けていくことが重要なのである。